

あとがきにかえて——キャリア教育と高等教育のグランドデザインについて

教育の現場に長い間いると、世間の人々の出来不出来、人々の行動の出来不出来がすべて自分の教育の成否に関わっているように見えて、いやーなタイプの人間になりがちだ。組織内の同僚、部下、上長までをも「どんな教育を受けてきたのだろう」という目でついつい見てしまう。その人たちの〈経験〉や〈才能〉よりも、受けてきた〈教育〉が気になる。

街のアルバイト学生に出会つても、新人社員の営業や飛行機のCA（キャビンアテンダント）に出会つても、デパートや家電量販店に行つて買い物するときも、「どこの大学?」「どこの専門学校出たの?」とついつい聞きたくなる。接遇面ばかりではなく、家電品、クルマ・オーディオなどの工業製品などを使つていても、なんという不出来な商品!と怒りに満ちた声を上げるときも同じ。いずれであつても背後に「人材」と「人材像」が存在し、「人材教育」が存在している。製品の出来も人材の出来に直結している。人を育てるということは人を育てられない分際の認識も含めて、社会観、世界観と無縁ではいられない。

そうやって、社会人はすべて卒業生（＝人材）という「偏見」に、私の頭の中は固まっている。職

業病だと思つて諦めるしかない。

そんな病の中でいつも疑問に思うことは、「いまのは、この子の個人的な資質によるものなのか、それとも教育が効いているのか（あるいは効いていないのか）」ということだ。もしいまの場面に適切に対応できる「人材」を作ろうと思ったら、どんな教員、カリキュラム、シラバス・コマシラバスが必要なのだろうか、と。

そのことに関して最近、私は別のことを考えるきっかけがあつた。田村耕太郎さん（元参議院議員）の紹介で昨年末、楽天の社長室長のAさん、人事責任者（常務執行役員）のSさんとお話を機会があつた。周知のように楽天は新卒枠の30%が海外の（特にアジアの）大学新卒者。アジア進出を考えてのことだろうが、なかなか問題も多いとのこと。「なぜですか」と聞くと、なぜこのような製品やサービスを提供しなくてはいけないのか、その「意味がわからない」とアジアのエリート新卒者たちは言うらしい。提供しろと命じれば「頭がいいから」すぐできるが、その意味をわかっていない、とS人事担当者。私は、「なるほど」と言つて次のように話を繋いだ。

私「頭の偏差値は高いけれど、消費者偏差値が低いんだよね、アジアのエリート学生たちは。日本の子どもたちは小さいときから、高度なマンガ・アニメ文化、ゲーム文化、携帯電話文化、そして接遇文化に馴染んでいる。国際的な秋葉原も近くにある。『頭がいい、悪い』に関係なく高度消費が空気のように身についている。消費に『頭がいい、悪い』はない。作れないかもしれないが、作る意

味はわかる。

楽天 S 「そうなんですよ、そこにズレがあるんですよ」

私「『頭がいい』『作る』ことのできる学生に〈意味〉を教えるのか、『作る』ことはできないけれども〈意味〉のわかっている学生に作り方を教えるのか、どちらが〈人材〉を作るのに早いか、簡単かということだよね（笑）。難しい問題だね」

楽天 S 「単に頭がよければいい、英語ができればいい、コミュニケーション能力が必要」という問題じゃないんですよ」

私「わかります、わかります（笑）。そう思いますよ。だけど、日本の教育関係者がそのことを一番わかつていな。口を開けば『日本の学生はバカだ、勉強できない、基礎ができない』になる。若者の消費偏差値の高さに気づいていない」

こんなやりとりだった。資質か、教育かという狭い議論を超えて、日本の消費文化の高さは職業人材を作るもう一つ別の〈基礎学力〉のようなものを形成している。国語・算数・理科・社会・英語だけが「基礎学力」でもないのだ。

ところが、この能力を受け止める高等教育が存在していない。専門学校は大学に行けない子どもたちの受け皿でしかない（もはやその境界もあやふやになりつつあるが）。「頭がいい」という体系はジエネラルエデュケーション→リベラルアーツの軸でしかない。消費偏差値の高さを活かす形で職業教育と

接続する学校教育体系が存在していない。専門学校は非学校系の厚労省・国交省・経産省系の資格ブレゼンスによってからうじて「学校」の体裁を持つているにすぎない。専門学校（専修学校専門課程）は議員立法の出自からも明らかにともどから文科省の関心の外の「学校」だった。自民党文教族（主には私学の早稲田系）の一九七六年施行の私学助成法圧力のどさくさに紛れてできあがったのが専修学校制度（同じく一九七六年施行）だった。地方名士による「各種学校」の格上げ圧力が文教族議員立法に結実したのである。四大進学率がこの時代にはまだ二〇%台（四大進学率は九〇年代初頭まで、この私学助成法による定員管理とオイルショック契機による所得上昇の鈍化などによって二〇%台にとどまる）だったことからすれば、この制度は議員立法であったとは言え一定の役割を果たしたとも言える。しかし、専門学校教育の核となる資格教育は受験教育の変種なのだから、その教育は予備校以上でも以下でもない。それは消費型の教育モデル（生涯学習モデル）なのである。だから厳密な意味での〈学歴（初等・中等・高等教育ヒエラルキー歴）〉にはならない。外部の資格取得目的の「学校」でありながら、「建学の精神」を持つというのも不思議ことなのだ。〈特色〉として競っているのは資格合格率だけなのだから。外部の〈資格〉目標すらない専門学校はもつとひどい状況だ。

要するに、高校卒接続の段階で、東大（リベラルアーツ）へ進学するのと対等の立場で選択することのできる職業教育体系が存在していないということ。専門学校や短大の一部が高校卒接続だと言つても一気に職業資格に飛んでしまうわけだ。〈人材像〉が存在しない職業教育にとどまっているのである。専門学校にとつて〈資格〉教育とは遅れてきた受験教育の象徴でしかない。より難しい受験教育

(大学受験) をより優しい受験教育(資格受験) で代替しているにすぎない。すべては努力賞指標にとどまっている。企業の期待は、資格の人材像への期待ではなくて、「その程度には勉強する癖をつけておいてね」ということにすぎない。学校接続「職業教育」の実績はその程度のものにとどまっている。

教育基本法改正(二〇〇六年) に際して新たに加わった「職業」教育とも並行した文科省の「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について」中教審最終答申(二〇一一年一月三一日)も、同じように「地域」人材育成に人材像が狭隘化されている。当初の中間答申や本答申「素案」ではもつとはつきりと「中堅人材」育成という文言がいくつもあつたが(「経済社会活動のボリュームゾーンをなす中堅人材として活躍する、さまざまな職業・業種における実践的・創造的な職業人を育成していく必要がある」素案七四頁)、本答申ではそれが「重抹消線と共に消えて、もっぱら「地域」人材としてのキャリア像に狭まっている。「中堅」ではこの答申の真意が露骨すぎるからだろう。

それもあって、この答申は複雑怪奇な答申になつていて、一方では、「職業教育」と「キャリア教育」を概念的に分離し、短期接続的な社会接続教育(主には専門学校、短大に見られる)を「職業教育」とし、それとは別の長期的な「自立的」社会接続教育を「キャリア教育」としている。つまり「キャリア教育」とは専門学校批判、短大批判のマークであり、職業教育はこの限りでは一段低い教育として差別されている。専門学校でも最近、「キャリア教育」科目を導入する学校が出てきているが、本末転倒の事態だと言わざるを得ない。

そもそもこの「キャリア教育」は学ぶことが仕事に就くことと結びついていない「学校教育」に導入されているもの。元から学ぶことと就職することが結びついている(はずの)専門学校に「キャリア教育」という科目があることを不思議に思わない専門学校関係者の見識のなさにはあきれるばかりだ。結局、平板な資格・受験教育によつて、具体的な職業人材像と分断されている分、流行の「キャリア教育」に誘惑されるわけだ。専門学校「キャリア教育」というのは自己敗北宣言なのである。しかしその持ち上げられた「キャリア教育」自体は、「中堅」人材、「地域」人材に狭められているわけだから、このキャリア教育もなお留保された人材教育にすぎない。言い換えれば、「一流」大学の卒業生キャリアの方が、この「キャリア教育」答申の人材像よりもまだ上にあるということ。「中堅」に対しては「リーダー」がいるはずだし、「地方」に対しては「首都(本社・本部)」人材(あえてそういう言い方をするとすれば)がいるのだろうから。

つまりこの答申は、結局は「職業教育」(広義の)をもう一度差別する答申になつていて、事実的には全入時代の大学(偏差値の低い大学)の救済策としてのキャリア教育答申にとどまっている。一方では専門学校の一条校化(質の向上課題)を先送りし、一方では崩壊しつつある低偏差値大学を救済する(大学設置基準をキャリア教育組織的に緩和する)という中途半端な答申になつていてるわけだ。だから入試倍率のある中堅以上の大学は、このキャリア教育答申に何の関心も持てない。あるいは高偏差値高校の「キャリア教育」も空回りし続けている。より高い偏差値の大学へ進学させることが高偏差値高校の教育にとつてもつとも実質的なキャリア教育であるだろうからである。

依然として「キャリア教育」は「頭の悪い」子供たちのものであり、「複線型教育の必要」と声高に叫ばれても、それは中曾根臨教審以来の「頭がいい」「頭が悪い」という二軸の複線にすぎない。頭が悪い子にわざわざ（無理矢理）勉強させる必要はないという臨教審的意欲主義、個性主義が未だに複線型思想の根幹を形成している。「意欲」「個性」「多様性」重視と言いながら偏差値トラック上の複線にとどまっているのである。

こうなってしまうのは、国語・算数・理科・社会・英語とは別の軸の教育が見出せないままになっているからだ。いわゆる高等教育の「グランドデザイン」課題と言われているものが棚上げされているのである。ジエネラルエデュケーション→リベラルアーツの、いわゆる「お勉強」系以外の軸とは別の高度職業教育を（高卒接続の）高等教育の中で展開するという課題が高等教育の「グランドデザイン」論というもの。

このグランドデザイン論は、「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について」中教審本答申の（言わば）準備議論としての「専修学校の振興に関する検討会議」（文科省）では熱心に議論されていた（第一回二〇〇七年一月七日～第二回二〇〇八年一〇月二〇日）。「学術教育を中心とする若者に対する育て方」と「職業教育を中心とする若者に対する育て方」「伝統的な高等教育の他に、実践的な職業教育に特化した高等教育機関が存在することは、国民に開かれた高等教育を保障することになるとともに、学術研究の中心としての伝統的な大学の質の維持にも資するものであること。従来の学校制度の中では必ずしも成熟してこなかつた職業教育について、職業教育の体系化の観

点から複線型の制度にして再構築する議論が必要であること」など。これが中教審本答申では消えてしまう。「新たな学校種」（検討会議）と言われていたものが「新たな枠組み」（本答申）という言い方で軟化するようにな。

この検討会議は、専修学校の職業教育（この場合は専門学校）の実際についてほとんど何も知らない一条校関係者が専修学校一条校化に向けて検討するという趣をもつていたが、結果として専修学校の職業教育に対する不信を増大させること（故なきことではないが）につながった——本答申含めて中心的人物となつた吉本圭一（九州大学）の報告（「高等教育としての専門学校教育」第三回二〇〇七年一二月二一日）にはその不信が端的に表明されている。^{※※}

※ 「一条校」とは、学校教育法「第一条」において、「この法律で、学校とは、幼稚園、小学校、中学校、高等学校、中等教育学校、特別支援学校、大学（短期大学および大学院を含む）および高等専門学校とする」と規定されている学校群のこと。専修学校はこの「学校」概念の中には存在していない。

※※ 先の文科省「専修学校の振興に関する検討会議」（第三回二〇〇七年一二月二一日）において、専門学校の現況を調査報告した吉本圭一（九州大学）は、専門学校の就職状況、中退率、教員の教育力（教育熱心度）などの観点から、以下のようないふうな数値を取り出して検討会議で報告している。

全国の全学科で専門学校卒業生の進路を調べてみると（文科省「学校基本調査一九九九年」）、

【就職状況】関連分野への就職が七〇%にとどまり、八%が関連分野以外、その上、無業者が二一・六%もいる。

【中退者】 中退者に関しては、一九八五年から二〇〇〇年の間の（「学校基本調査」の）平均値で見ると、専門学校は一五%、短大は五%、大学は七%。専門学校の方が大学より中退者が多い。

【教育熱心】 「教員が教育熱心」と言われている専門学校の、教員一人あたりの学生数は、専門学校一八・三

人。同じく短大は一九・三人、大学は一八・七人。常勤教員の持ちコマ数は、専門学校一二・七時間、短大八・四時間、大学八・六時間。対学生数は大学とも変わらない。その上、持ちコマ数が大学・短大と比べて多い中、きめの細かい指導ができると言えるのか。

こういった調査・報告を進める中で、吉本は、大学などに対し専門学校が「就職の専門学校」であり、「教育熱心」であると言えるのかと反問しています。さらに、別の論文の注釈の中では、専門学校のデータがあまりにも公共的に貧弱で、実態が見えないと吉本は嘆いています。

その結果、その吉本も入った「専修学校の質の保証・向上に関する調査研究協力者会議」（平成二四年五月八日から現在まで続く）では、もはや専門学校の「質の保証・向上」は元通り専修学校制度枠内の「改善」に収まってしまった。「職業実践専門課程」（仮称）の新設とは言うが、専修学校課程の中の一つにすぎない（専修学校制度を「わかりやすい制度」とするという議事録がこの会議の最深レベルである）。

結局、一条校既得権の厚い壁を打ち破ることができなかつたなれの果てが、「専修学校の質の保証・向上に関する調査研究協力者会議」なのである。中教審キャリア教育答申（二〇一一年一月三一日）の議論の経緯の中で、一条校にはなりたいがなるといろいろうるさく言われそそぐと感じた専門学校関係者が、せめてこれくらいのことはやつてほしい、と願い出て落ちぶれた末の「職業実践専門課程」である。実態は「専門課程」と何も変わらない（変わりたくないのだから）。専門学校（専修学校専門課程）のほとんどが小規模校（「学校」とはとても言えないほどの）であることから、それなりの規模を有した専門学校を分離することがこ

の「職業実践専門課程」の実質的な意義にすぎない。

しかし専門学校の職業教育は、大規模校であれ、小規模校であれ実態は変わらない。実態は三つある。
①担任主義の出席重視教育
②資格主義教育——資格すら目標としない専門学校のカリキュラムはもはや力オスにすぎず、「カリキュラム」と言えるもの自体が存在しない
③慢性化する追再試体制である。何度も言うようにその結論をなぞったのが、「キャリア教育」と「職業教育」とを差別的に分離したキャリア教育答申（二〇一一年一月三一日）だった。それもあって、吉本（九州大学）、小方（東京大学）、黒田（金沢工業大学）などの大学委員の議論に対して、専門学校関係者の対応はまったく要を得ていない。

たぶん「職業実践専門課程」は、子供だましのような自己点検評価（いわゆる元からずさんな「東京フォーマット」の変種）つきの体裁をもつて終焉するのだろうが、専修学校（設置基準の緩い）の枠内では何も変わらないのは目に見えている——自己点検評価に加えて、企業連携カリキュラム、企業連携演習（演習、実習、実技及び実験）型授業の導入、教員研修などの条件がつけられそうな気配だが（二〇一三年六月時点）、これらの定量的な基準は一切示されていない。そもそも二〇一三年六月一七日の「専門学校における職業実践的な教育に特化した枠組みについて」骨子案（文科省）では、キャリア教育答申以来キーワードとなっている「実務の卓越性」の内容や判断基準等について共通理解が困難な状況であるため、職業実践専門課程（仮称）の目的においてはこれに言及しないことになっている。演習型授業の導入についても「専門学校の分野ごとの演習・実習等の実態を見ると、総授業時数に占める演習・実習等の授業割合は様々であり、質の高い実践的な職業教育による成果を上げているかどうかを判断するに当たり、一律に定量的な授業割合を基準とすることは必ずしも適当ではない」。さらに教員条件についても「専門学校の各分野ごとの教員資格の実態は多様であり、また、教員に求められる実務卓越性や指導力の考え方が必ずしも十分に共有されていない現段

階では、それらを備えているかどうかを判断するに当たり、一律の基準を設けることは困難である」となっている——「実務卓越性や指導力の考え方が必ずしも十分に共有されていない現段階」で「基準を設けることは困難である」と言いながら、その「共通理解の困難な」「実務卓越性」という奇妙な言葉は使い続けるのだから（一説によればこれは吉本圭一が好きな言葉らしいが）、この骨子案自体が「様々」な「多様性」に紛れてしまっているのである。

しかし、この種の「様々」な「多様性」こそが専門学校教育の停滞と質の低下を招いたというまともな指摘（「新しい専門学校制度の在り方（専門学校の将来像）」全国専修学校各種学校総連合会・二〇〇六年）をしていたのは、他ならぬ専門学校関係者自身である。そのことに何も手をつけようとしないのだから、この「職業実践専門課程」が専門学校の質向上に何も寄与しないのは目に見えている。

非文科系の資格主義教育に長い間馴染んできた専門学校には、①「カリキュラム」という意識そのものが希薄であること ②学納金収入が大半である専門学校の現状では募集・広報優先の「企業提携」しか実質がないこと ③そもそもカリキュラム開発や企業提携の内実であるシラバスやコマシラバスを書ける教員が乏しいこと（教員研修の成果を期待するにしてもそもそも教員資格の高度化なしには実質的に難しい）などの根深い問題があり、それもこれも専修学校制度の中の「教員資格」に手をつけないからである。

そもそもこの「骨子案」の最初の頁（二頁）では、キャリア教育答申（二〇一一年一月）を錦の御旗（「新たな枠組みの制度化」という御旗）にしながら、後半の段落では、高等教育「段階」とか、新たな枠組みの「趣旨」とか、新たな枠組みの「先導的試行」というように文言が曖昧化し、この「職業実践専門課程」が「新たな枠組み」ではないことが（官僚文書的に）告知されている。タイトルも従来の「専門士」「高度専門士」と区別された「独自の称号を付与することは、現時点では行わない」と宣言されているから、現在の専

門課程（専門学校）と何も変わりはない。結果的には一年課程ではないことが唯一の定量基準である。その上「生涯学習の振興に資すること」と、この新課程の「目的」の末尾が締められていることから、〈学校体系〉接続からの専門学校の位置づけは従来よりさらに弱まる気配だ——「キャリア教育」答申と並行して動いていた「専修学校教育の振興方策等に関する調査研究」（二〇一〇年一月～二〇一一年三月）、それを受けての今回の「専修学校の質の保証・向上に関する調査研究協力者会議」の一貫した傾向は、専門学校の〈学校〉接続（高大接続）を、生涯学習的（厚労省的なりカレント教育）に軽薄化することにある。まさに職業教育の高度化の全面的断念表明が、この「職業実践専門課程」である。

さて、専修学校は（専門学校も含めて）基本的に時間主義でしかない。だから追再試も慢性化する。資格の外観主義が単位主義の精神になじまないのだ。自己点検や第三者評価は、専門学校私学助成への第一歩だろうが、在籍率や就職率の実数表示さえ評価項目にない点検評価（東京フォーマット）をいくら重ねても「質の保証・向上」は望めない。

要するに、お金（私学助成）は欲しいが、まともな自己点検評価はやりたくないということにすぎない。まともな実数を出せない点検評価は、まともな取り組みを阻害する。元からいい加減な数値や評価を公表しているとまともなことをやつたときとの「違い」を見せることができなくなるために、逆にまともな取り組みへの動機を殺いでしまう。やらないよりやつた方がましなのでなくて、いい加減な取り組みはむしろ「質の保証・向上」を阻害する。そもそも現在の専修学校の自己点検は、小学校自己点検評価の「準用」にすぎない。職業教育組織らしい点検評価の影さえもない。お金もくれないでまともなことができるはずがない（専門学校経営側）、まともなこともできないのにお金（公金）をつぎ込むことなどできない（文科省）の双方の悪循環を誰も突破できていないのが現状。残念でならない。

また既得権を持つ大学関係者からは、「複線型の教育体系には賛成だが、既存の大学等においても職業教育を行つてゐるので現行制度との整理は必要」などという思惑がらみの発言もあり、この検討会議以降、「一校化」「グランドデザイン」という言葉は、(文科省内部で)消えていく。本答申ではこれらの言葉は、「特化した枠組み」「新たな枠組み」という言葉に軟化するわけだ。その軟化の挙げ句の果てが文科省の「キャリア教育」本答申である。

文科省(あるいは吉本圭一)がグランドデザイン論を断念した理由は、唯一の手がかりとされた専門学校の職業教育が高度職業教育のモデルにはなり得なかつたことが大きいが、それ以上に両会議を主導した大学関係者に職業教育を導く理論も経験も能力も(そのうえ関心も)なかつたことが大きい。もちろん、それ以上に専門学校の代表者がもつと情けなかつたのだが。

しかしそれはないものねだりといふものだ。実質的には、二極化した大学の底辺が「専門学校化」するか、専門学校が「高度化」するか、どちらかが新設置基準を満たせば、それが「特化した枠組み」「新たな枠組み」ということではある。そしてどちらにしても高等教育としては「底辺」にすぎない。「キャリア教育」答申は、志も戦略もない答申にとどまつたのである。

日本の若者の消費偏差値の高さに誰も気づいていない。グランドデザイン論は消費偏差値が高い日本のような国において以外には、ヨーロッパやアメリカのような階級教育の変種としての職業教育にしかならない。

製造業が海外移転し、IT化と非正規雇用と大学全入などによつて若者の行き場がなくなつた。

そのおかげで軽薄なコミュニケーション主義、コミュニケーション教育が蔓延してゐる。まるでそれが「キャリア教育」でもあるというようにして。

しかし、「こういう商品じゃないと私は買わない」とか、「こういうサービスのない店には行かない」という動機を、それらを「作る」動機に転換させること、それが「キャリア教育」。

事実、日本は、街全体が「教育」に充ち満ちてゐるわけだ。街ばかりではなく、自宅の、自室の身の回りのものそのものが「教育」に充ち満ちてゐるわけだ。子供から大人まで一億総批評家になつてゐる。おびただしい商品批評コメント、サービス批評コメントを見れば完成品に対してこんなにうるさい国民はいない。買わないものにまで口をつけ、買った後まで他人のコメントを気にする。このパワーが消費偏差値の高さを物語つてゐる。

その意味で言えば、高校卒業の時点ですでに消費者として、子供(生徒たち)は充分に「社会」に出でてゐる。ジエネラルエデュケーション→リベラルアーツの軸でしか学校教育(高等教育)が存在しないのは、そしてまたその裏方のような職業教育(専門学校教育)しか存在しないのは、実はそれらが「学校後進国」の体系にとどまつてゐるからにすぎない。消費偏差値の高さに裏付けられた職業高等教育選択が存在しうる素地が日本にこそ存在してゐるにも関わらず。

学校教育の現場では、この早くから社会外部化した児童・生徒・学生たちを「オレ様化する子供たち」と厄介者扱いしたり、「学校教育もサービス産業。児童・生徒・学生たちはお客様」などどうそぶく人たちがたくさんいるが、社会批評、社会選択を基盤にした学校教育体系が少なくとも高等教育

以降は存在するべき」とを、それは、意味しているにすぎない。〈キャリア教育〉とは、自分がどんな商品やサービスを提供したいのかを無条件に——この著作全体で再三指摘したように「社会ニーズ」に断片化されずに有機体系的積み上げ型カリキュラムとして——逆算して学校教育を再編することに他ならない。その道を示すことができれば、東大志望の高校生も職業教育を選択するときがやってくる。高大連携の鍵を握るのはこの意味での〈キャリア教育〉なのだ。

一年後に還暦を迎える私は、やつとやり残した仕事が見えてきた。もう遅いのかもしれないが、新しい〈学校〉が必要なのだ。大学も専門学校も新しく生まれ変わらなければならない。いま私の周りにいる人々はそんな思いに駆り立てられた人たちばかりだ。上にも下にもこぼれている日本の若者の可能性に目を閉ざす教育の現状、それに対する大人側からの反旗の思いがこの本の記事一行一行の中に、一〇年間の記事の中に込めてある。老婆心なしにはできない仕事のような気もするが、私の場合は老爺心だ。うるさい親爺だなと思って諦めてもらいたい。

＊＊＊

この本の出版の経緯は、ロゼッタストーン社の弘中さんが私の講演に参加されたのがきっかけになつていて、「先生の学校・集中講義】授業法と評価法——〈学校〉における教育目標とは何か」という講演（1101—1年2月六日）だつた。広報もしないのに全国から100人以上の参加者を得て盛況だ

つたが、この講演は二時半から八時半までの五時間程度を予定、五時間でも長いがしかし最後には二時半を超えて、八時間もの講演になつた。しかも私は立ち放し。休憩は一切なしで。新幹線や飛行機経由の参加者はさすがに一九時過ぎには帰られたが、それでも八割近くの参加者は最後まで残られ、思い入れのある講演になつた。

最後までおられた参加者のお一人が弘中さんだった。彼女によれば、私の（少し難しい）理論的な話よりは、むしろ私の実践や教育実績に関心をお持ちになつたようだ。「ぜひこの実践を教育に関心のある人や若い人たちにも知つていただきたい」との思いで、講演の文字起こしを自身でなされ、出版しましよう、ということになつた。^{*}

※この、弘中さんとの出会いのあつかけになつた講演の感想のいくつかがネット上で公開されている。

- 「授業法と評価法『学校』における教育目標とは何か」を聴いて
<http://blog.livedoor.jp/buu2/archives/51208387.html>
- 「授業法と評価法」を聴講
<http://ashes.way-nifty.com/bcad/2011/02/post-4360.html>

それ以後、文字起こしの原稿を加筆修正の日々が続いたが、原稿は三倍以上にふくれあがり、次々と加筆修正し続けていたうちに一年も経つていた。「これではいつまで経ってもできないかも」と私の方から相談を持ちかけた。「関連するものなら、ブログにいくらありますから、それを再編集

してはどうですか。最初から書き言葉になつてあるブログの加筆修正の方が遙かに早くできると思いません」と言つたのが昨年の一二月。その加筆修正ももうかれこれ半年経つていて。

ブログ掲載記事の一つ一つの四割以上を平均で加筆修正している。特に第九章「ツイッター微分論」は、二倍以上加筆修正、気分的にはほとんど書き下ろしの記事になつた。この本の中核をなす第九章「機能主義とメディアの現在」の加筆・修正——同時に二年以上書けないでいた日経BPnet連載の最終回（第一〇回）の完成——が私に可能になつたのは、なんと言つても東日本大震災が機縁になつている。

この本は東日本大震災の衝撃なしには生まれなかつた。第九章全体の序論とでも言える「氣仙沼はどうなつてゐるのか」（二六六～二七三頁）で、「私は、いま『新人』のことを考へてゐる」（二六九頁一行目）とポツンと書いたとき、ツイッター微分論の「新人論」——「走り出そうとしている人」（ハイデガーメ）論（特に三七二～三九一頁）は、まだ私の念頭にまつたくなかつたが、「機能主義とメディアの現在」をたびたび挫折しながら補完的に書き進むにつれて、別の時間の出来事だつた震災論とツイッターメ論とが一気に結びついた感じがした。

と同時に、二〇代、三〇代の哲学探究といまの教育実践との架橋（さらにはブログ読者とツイッターフォロワーとの架橋）がこの加筆・修正の分量になつてしまつた。第八章までの総括的な論考としてもまとめてある。私の一〇年来のブログ読者にも少しは読み応えのあるものになつてゐるはず。これも弘中さんの八時間講演連続受講のたまものだ。出版には何の関心もないわがままな私の遅筆と出

版直前までの分割み、秒刻みの加筆修正に耐えてくださつた弘中さんに、この場を借りて深謝します。また早稲田大学「ニーチェ研究会」以来の付き合いである芦澤昌彦さん、宮川進悟さん、ツイッターで出会つた貫井隆さん、小倉佐知子さん、金橋香代子さんなどには校正をお手伝いいただき大変感謝している。特に芦澤さんには、PDF原稿から索引語+頁体系を自動生成させる「アプリケーション」を私のためだけに開発していただき、類書に例を見ない充実した索引語ページになつたと思う。このアプリ設計は、何よりも、すべての原稿に目を通した意味論的な読解が前提になつていて。誰にも作れないアプリだと思う。下手な、私の追加の解説よりも、この索引語体系の方がはるかに何かがわかるような体裁を保つてゐる。「検索」と「索引」とは違うのだということに対する、電子書籍派への、私たちの少しばかりのイヤミもある。今の時代、「出版」ほど無謀な行為はないと思われるが、「本で読みたい」という読者の期待に少しでも応えられたら、この無謀にも意味がある。

そんなたくさんの無謀な思いがこの本に込められていて。無謀な若者たちにこそ、しっかりと読んでもらいたい。

二〇一三年六月 初夏の香りする品川・御殿山にて 芦田宏直